

真福寺蔵『法華論』の訓点について

中
野
直
樹

About the Glosses of the “*Fahua lun*” housed at Shimpukuji- Temple

Nakano Naoki

The early Kamakura period manuscript of the “*Fahua lun*” housed at Shimpukuji-Temple is notable not only for its Buddhist content but also for its punctuation marks, including *Okoto-ten* and *Kana-ten* which indicate how the text was read at that time and are of interest from a linguistic perspective. While this manuscript has been previously introduced in prior studies as a kanji punctuation source (*Kitanoin-ten*) from the mid-Heian period, this paper aims to delve more specifically into the punctuation rules.

This study focuses on the phenomenon that has been pointed out regarding the presence of archaic readings in the punctuation rules, and it examines the time period reflected in the punctuation marks of this manuscript, including the descriptions in the colophon. The analysis will explore to what extent the punctuation marks of the “*Fahua lun*” retain old reading formats, as well as how this manuscript can be positioned as a linguistic resource. Additionally, it will touch upon the continuity of punctuation marks.

Furthermore, it aims to consider the reading style of that time inferred from the punctuation marks of this manuscript. When utilizing punctuation materials as linguistic resources, primary annotated materials without transpositions or editorial changes, in other words, materials with initial annotations and clear information in the colophon about the annotators and the time of annotation, are easier to handle as linguistic resources (if there are transpositions or editorial changes, it necessitates consideration of rearrangements and omissions, and without a colophon, questions arise about the originator and the time of annotation). However, even if there were transpositions or editorial changes, instead of diminishing the linguistic value of the materials, this study proposes that they should be evaluated as representations of the reading and reception of that time, including such transmission.

There have been doubts about the conventional view that punctuation marks became more fixed and standardized with strong continuity after the 12th century, and even in this early Kamakura period manuscript, the punctuation marks might not have been fixed and could still have been fluid. This study will reexamine the aforementioned manuscript from a new perspective that differs from the conventional view.

真福寺蔵『法華論』の訓点について

中野直樹

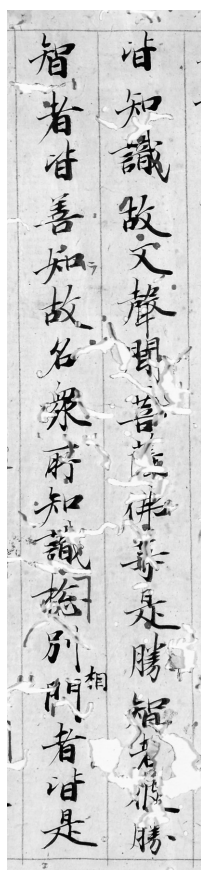


図1 本文訓点例

一 はじめに

真福寺蔵『法華論』（以下、本書を指して「法華論」とする）の本文には当時の本文読解の跡を示すヲコト点^①および仮名点をはじめとする訓点^②が巻末まで加^③点されている。本書はすでに中田（一九五四・三二三）・築島（一九八六a・一九九六・四二三―四二四）・小林（二〇一八・一〇七一―一〇八）において、平安後期の喜多院点資料として紹介されている。本書については、中野（二〇二三）でも概略を紹介したが、紙幅の都合で多くは省略した。本稿では、本書の訓点^④がいつの時代の訓法を反映していると考えられるのか、その訓点はどのような特徴を有しているのかについて奥書も含めたうえで考察を行う。また、訓法の新古についてどのように考えるべきかについては、最近の国語学

の動向も踏まえて紹介したい。

二 「法華論」の奥書

まず、本書の巻末の奥書を確認する。奥書は次のとおり（字体は通行のものになおし、各文に対し私に（ ）で番号を振った。行送り等はできるだけ本文の通りとした。■は虫損。奥書の画像は掲載誌口絵を参照）。

（1…墨）点本云天平勝宝七年歲次乙未年三月廿七日僧定鰲師

（2…朱）治暦四年^{甲申}二月二十六日^{未刻}小田原山寺迎接房移点已畢仮名比丘経源

同十五日一交了

同年七月十日^{辰時}於同处移導畢

（3…墨）元久二年四月二十一日於菩提山慈恩院移点畢

僧慶玄

本書の奥書は(1)の天平勝宝七年(七五五年)のものから、次いで(2)の治暦四年(一〇六八年)の移点奥書へと並ぶ。(3)の元久二年(一二〇五年)の奥書も移点奥書なので、筆者は(1)と(2)を本奥書と判断する。中田氏・築島氏・小林氏は本書を平安後期加点資料と位置付ける。これは(2)と(3)の奥書を次のうち、次のどちらかの観点から見たものと考えられる。

I (2)と(3)ともに別筆で移点奥書とし、訓点の朱墨と奥書の朱墨が対応している。つまり、(2)と(3)の時点で本書には少なくとも二度移点があったと見る。本書の訓点はほとんど朱筆なので、平安後期加点資料として位置付ける。

II (2)は本奥書で(3)の移点時に忠実な移点作業が行われ、訓点の朱墨と奥書の朱墨をふくめそのまま再現された。この場合、(3)の移点者が用いた点本には、既に朱墨両方の点があったか、(3)の移点の際の追加の墨点があったかとなる。忠実に再現された訓点であるから、鎌倉初期の移点とはいえ実質的に治暦年間(平安後期)の訓点と見る。

先行研究がIと見ていたなら、本書の墨点のごくわずかなため、本書の訓点はほとんど治暦当時の点であろうという判断であるし、IIと見ていたなら元久の移点の際に改変はほぼ行われずそのまま治暦の訓点が保存されたという判断となる⁽⁵⁾。筆者は、本書の訓法の状態から(2)を本奥書と見て(3)を移点奥書と見るので、IIの考え方に近いのだが、移点の際の訓点の改変を想定するので本書を平安後期の資料ではなく鎌倉初期(移点)の資料として提案したい(これについては四章で考える)。また、各奥書と訓点が同筆か別筆かが問

題になるが、筆者はいずれも同筆と判断する⁽⁶⁾。これは、本文中の訓点および導(朱墨とも)と奥書の漢字字形(互いに共通するもの)を比較したことによる。

本書の奥書には三つの僧名が見える。三名のうち、定叡は未勘だが残る経源⁽⁷⁾と慶玄⁽⁸⁾は法相宗関係の僧と考えられる。(2)の小田原山寺は京都の浄瑠璃寺を指し、(3)の菩提山は奈良の正暦寺の山号で、慈恩院は同寺の別院の一を指すものかと思われる⁽⁹⁾。浄瑠璃寺は、久安六年(一一五〇)に興福寺一乗院の祈願所となっており(『望月仏教大辞典』)、正暦寺は興福寺別当であった信円が再建に関わるなど、興福寺と関係があった(大原・大原(一九九二・三七))。これらからすると、先行研究が指摘するように本書に法相宗所用の喜多院点⁽¹⁰⁾が使用されたこと自体は自然である(ヲコト点については後述)。

中田氏・築島氏の報告では(1)の奥書が省略されている。おそらく、(1)の奥書は訓点と関わりがないとの判断によると思われるが、本書に天平勝宝の奥書が存在していることは興味深い⁽¹¹⁾。というのも、従来本邦においてヲコト点・(片)仮名点が加点されるのは九世紀前半頃とされており、仮にこの(1)の奥書が本書の訓点に関係していれば、通説よりも数十年早くヲコト点・仮名点が加点されていたことになる。このことについては、次節以降で見ていくことにしたい。

三 訓点について

三―一 ヲコト点と奥書の記述

本資料の本文に加点された訓点は大部分がヲコト点である(ヲコト点はす

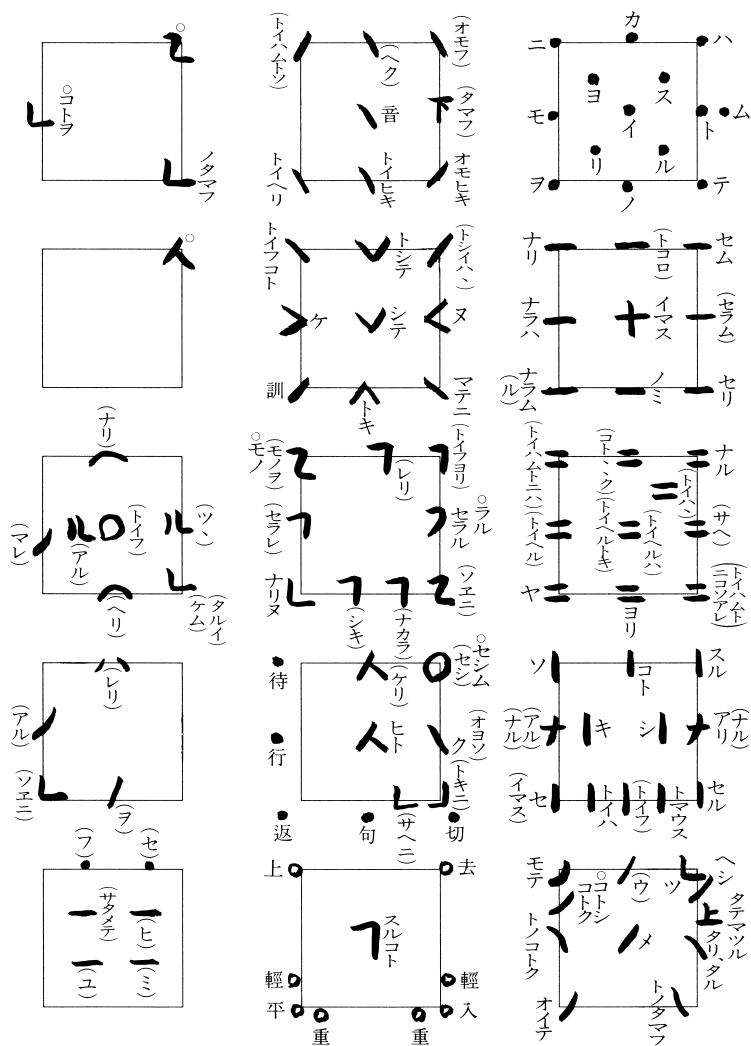


図2 喜多院点図（築島（一九八六b；八九）による）

（一九五四・六四五―六四九）・築島（一九八六a・一九八六b・十二・一九九六・九二七―九五八）等）。とすれば、本書のヲコト点に喜多院点が使われている以上は、明詮在世以前の訓点ではありえないことになるので、残念ながら冒頭の天平勝宝七年云々の奥書は少なくとも本書のヲコト点には関係しないということになる。

本書のヲコト点には中央に強調の助詞として「イ」と読ませる点があったり、「者」字をヒトと読ませたりする訓が存する。これらは古い読みとされ、本書には平安初期頃までに成立している古形が残っていることは確かである。しかし、そういった訓法の遺存は平安中期以降の喜多院点資料に見られることであり、直ちに天平勝宝七年の訓点の残存例と判断すべき証拠にはならない。

三―二 仮名字体

べて朱筆）。このヲコト点¹³は中田氏・築島氏によって喜多院点（第二群点）であることが指摘されている。喜多院点図と（図2）、筆者が本資料から帰納した点図を比較すると（図3）、ヲコト点は殆ど合致する（点図に記載されている喜多院点と本書のヲコト点とは小異があるが、数種の点異なるのみであり変種とまでいう必要はない）。

このとき注目されるのは先の(1)の奥書である。喜多院点は平安初期から使用例があり、元興寺の明詮（七八九―八六八）から発生したとされる（中田

本書の仮名字体は（図4）のとおりである。仮名点の大半が朱点であるが、稀に墨点が混じっている。仮名字体は終画がやや伸びているが、平安後期～鎌倉初期頃の形と判断する。仮名字体の面からも先行研究は平安後期資料としたのかもしれない。字体も一音節一字体にほぼ収斂しており、平安中期～後期以降の状態に近い。しかし、朱墨の筆はいずれも形が似ているので、筆者は朱墨ともに元久加点と判断し、全体の訓点を鎌倉初期加点（移点）であると見る。仮名点は奈良時代において使用された例がまだ報告されていない

符	ン	ワ	ラ	ヤ	マ	ハ	ナ	タ	サ	カ	ア
、			ラ		イ	ハ ハ ハ	ナ ナ ナ	タ	サ サ サ	カ カ カ	ア
ヒ	給	中	リ		ミ	ヒ	ニ	チ	シ	キ	イ
人	下		リ			ヒ	ル ニ ニ		い	、 支	イ
	奉		ル	エ	ム	フ	ヌ	ツ	ス	ク	ウ
	上		ル ル		ム	フ			ス	ク ク ク	
	事	エ	レ		メ	ヘ	ネ	テ	セ	ケ	衣エ
		エ	レ レ			ヘ		テ 天 テ	セ セ セ	ケ	
	時	ヲ	口	ヨ	モ	ホ	ノ	ト	ソ	コ	オ
		シ シ					ノ ノ	ト ト		コ	

図4 「法華論」 仮名字体一覧

鎌倉初期加定の資料に平安初期の訓法が見られるということは、古い形式と新しい形式が「法華論」に混在しているということになる。ここでは、「法華論」の訓法の新古について検討を行う。訓法に関する先行研究をいちいち挙げないが、訓法の変遷についての詳しい議論やこれまでの諸先学の先行研究については小林（二〇一二a・二〇一二b・二〇一三・二〇一七b）に纏められているので、そちらを参照されたい。

再読字は訓読に際して一度読まれ、下接の文を読んだ後再度読まれる漢字を指すが、平安初期から中期にかけては再読しない形式が優勢であったとされる。「當」「未」等、後世再読字となる諸字をそれぞれ「ベシ」「ズ」のように助動詞として、また、「マサニ」「イマダ」と副詞として一度だけ読んだ。後世において再読される漢字を本書から拾い、その字が再読されているか否かを【表1】にまとめた^⑩。

【表1】をみると本書においては後世に再読となる字を殆ど再読していないという結果が得られた。この結果から本書が平安初期～中期頃の古い訓法を有しているとみることができる。

僅かな例しか本書からは拾えなかったが、「者」字は平安初期の点本において人を指す場合「ヒト」と読む例が多く、平安中期以降に何を指す場合にも「モノ」とな

表2 「者」
字の読み

3	ヒト
0	モノ
3	計



図7 「未」字再読
例 (541 行)

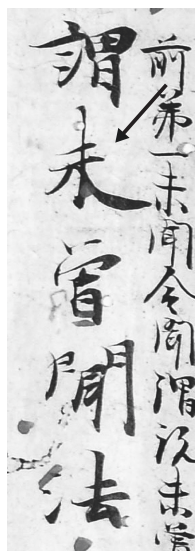


図6 「未」字不
再読例 (501 行)

表1 再読字一覧

再読	不再読 ⁽¹⁸⁾	不明 ⁽¹⁷⁾	
0	12	0	令
0	11	12	応
1	10	2	未
1	1	4	当
0	0	1	須
0	0	1	宜
0	0	1	猶
0	0	0	将
2	34	21	計



図5 朱筆左右
訓の例



図11 「於」字二
訓例 (196 行)

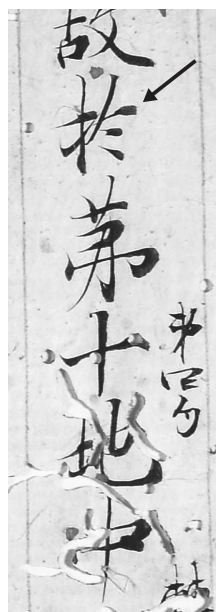


図10 「於」字不読
例 (122 行)

表4⁽¹⁹⁾ 「於」字
の読み

35	不読
6	ニ ⁽²⁰⁾
6	(ニシ) (オイ) テ ⁽²¹⁾ テ
1	ヲ
0	ヨリ
0	ウヘニ
13	不明 ⁽²²⁾
61	計

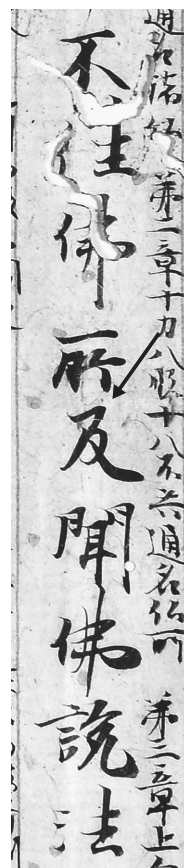


図9 「及」字不
読例 (530 行)

表3 「及」
字の読み

9	不読
0	ト
0	オヨビ
9	計

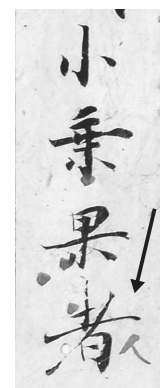


図8 「者」字ヒ
ト訓例 (479 行)

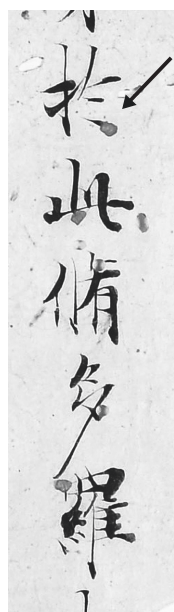


図12 「於」字テ
訓例 (152行)

った。これも、本書加點時の鎌倉時代にしては古い訓を示していることになる【表2】。

並列用法の「及」字の訓については平安初期では不読、若しくは「ト」と読まれ、平安中期以降に「オヨビ」の読みが見られる。喜多院点を用いた資料では平安中期以降も不読や「ト」として古訓を保持することが多いとされる。本書は不読例のみでその指摘に沿うものといえる【表3】。

「於」字は平安初期より、不読であったり「ニ」「ヲ」「ヨリ」「ウヘニ」「ニシテ」などと様々に読まれたりする字である。院政期から鎌倉期以後にかけて「於」字に対して、「オイテ」と附訓されるようになる。【表4】の状況から明らかのように、「オイテ」と附訓された例は少数であり（これがニシテであれば0例ということになる）、古形が優勢といえる。

・助詞「イ」



図13 助詞「イ」
加點例 (163行)

本書において助詞「イ」は6例拾うことができた。この「イ」の役割は、

「主として主語につきそれを特示強調する助詞」（『訓点語辞典』二二六頁）とされてきた。²³ この助詞は、平安中期頃には衰えるが、喜多院点資料など法相宗に関係する点本においてはそれ以降にも使用される。本書が興福寺に関係する僧による加點であるとすれば、「イ」が用いられていることに不思議はないが、言語としては平安初期以来の古い形式であり、鎌倉初期にあつては訓点資料以外において普通には用いられていないし、訓読の場でも一部に用いられる古い用法であつた。

以上、本書の訓法には平安時代初期以来の古い形式の訓法が混入していることが明らかとなり、小林（二〇一二a・b・二〇一三）の、法相宗に関係する訓点資料では古い訓法が残りやすいという指摘が本書にも当てはまることが確かめられた。しかし、本書のような鎌倉時代に移点された点本に平安初期以来の訓法が確認できたとしても、本書のすべての訓点が平安初期の形式を持っているとか、移点の際に使用した『法華論』をすべて忠実に移点したとみるよりは、元の訓点を参照しつつも移点の際に訓点の改変があつたと考える方が平安後期以降の訓点の実態に近いようである。²⁴

四 移点された訓点をどう考えるか

従来は訓法の固定化および新古の訓法の混在が訓点資料を当時の言語資料として観る際の、一つの難点とされてきた。²⁵ 月本（二九九三）は、十二世紀の訓点資料において同一本文を持つ資料同士であっても、それらを相互に比較すると訓法が一定になることは多くないことを指摘したうえで、個々の資料ごとに少しずつ訓法が異なることから、固定化が始まるとされている平安

後期においても前代の訓点を引き継ぎながらも未だ流動性を持っていたのではないかとする。さらに氏は、鎌倉初期頃には移点が多くなることは事実であるものの、その頃に初めて施される訓点も存在するであろうし、移点者が私案を加えることもあるはずと指摘する。以上のような加点実態があれば、当然訓法に新古の形式の混在も想定できることになる。

訓点資料を言語資料として活用しようとしたときに、移点や校合を経ない、いわば一次加点の資料で、なおかつ奥書に加点者や加点時期が明記されているものが言語資料としては扱いやすい²⁶。しかし、移点・校合があつたとしても、それによって言語資料的価値を一段落とするのではなく、その時代に本文がその形で読解され受容されたことが重要であり、それこそが移点・校合された時代の訓読の姿であることを評価すべきという考え方が松本光隆氏により提出されている。松本（二〇一七：八十四―九十九）は、仁和寺蔵『医心方』（天養二年（一一四五）移点本）を用いて、一見するとただ一種類の訓点が加点されているように見える本文に他本の複数の訓が入り混じることがあることを指摘している²⁷。松本氏は次のように述べる（九十五頁）。

このような複層的資料の書写、移点が行われて一つの資料が出来上がる時代においても、一資料または一具の資料として認識されていた筈であつて、その時代から複層性を内包したまま伝えられたのは、確たる事実である。

『法華論』と『医心方』とでは加点時期も資料のジャンルも異なっているが、訓点が流動的に動いている時代であれば、訓点を全面的に改めない限り、

訓点が複層的になることはどの本にも起こりうることである。今回は複数の『法華論』同士を比較したわけではないので、具体的な訓点の混在の有様を明らかにすることはできないが、本書もまた移点本であるので、訓点が混在していることを想定することは必要である。このように考えれば、治暦年間までに成立していた『法華論』と鎌倉初期に成立した本書とで読みが全く同じというわけでは無かつたと考えるのが自然である。本書の奥書には移点が表示されているわけであるから、少なくとも部分的な訓点の改変は想定できる。加点者が私案を加えたり他本の訓点を取り入れたりしたために、あるいは、『法華論』の訓点の伝承性がそもそも強かつたために本書の訓法に新古が混じっていたとしても、それが鎌倉初期の『法華論』の一訓読の姿なのであり、本書の加点者は当時まさにこの形で読んだということを重視すべきである。

五 まとめ

本稿で述べたことは以下の通り。

- ① 本書は治暦年間の喜多院点を引き継ぐ鎌倉初期移点資料である²⁸。
- ② 本書には喜多院点が用いられていることから、天平勝宝の奥書はヲコト点には関係しない。また、奈良時代に（片）仮名点が使用された例がないので、本書の仮名点も天平勝宝の奥書とは関係しないと考える。但し、返点と句切点はこの限りではない。
- ③ 本書の訓法には平安初期以来の古い形式とそれ以降の新しい形式が混在している。

④ 本書は移点資料のため、複数の訓点が生じ混在している可能性や訓点改変の可能性はあるが、鎌倉初期にそういった訓点により『法華論』が訓読されていたことを重視すべきである。

平安後期以降になると、多くの資料で訓点が生じ固定していくような論があるが、当該期以降も訓読が変化していたことは、今後他資料を含めさらなる実証的な調査・考察が必要である。本書は、加點者が明らかに全文訓読もある程度可能であり、平安後期以降鎌倉初期頃の訓読の実態を考へるうえで、の好資料となり得るものと考えられる。³⁰⁾

参考文献

- 浅野学『真福寺蔵『法華論』の紹介と史料的价值』（『いとくら』十二、二〇二三）
追塩千尋『中世の南都仏教』（吉川弘文館、一九九五）
大竹晋『法華経論 無量寿経論 他』新国訳大蔵経十四（大蔵出版、二〇一一）
大原弘信・大原真弓『正暦寺一千年の歴史』（『正暦寺一千年の歴史』正暦寺、一九九二）
高山寺典籍文書総合調査団編『高山寺経蔵典籍文書目録第二』（東京大学出版会、一九七五）
小林芳規『平安時代の仏書に基づく漢文訓読史の研究 初期訓読語体系』（Ⅲ）（汲古書院、二〇一一a）
——『平安時代の仏書に基づく漢文訓読史の研究 中期訓読語体系』（Ⅳ）（汲古書院、二〇一一b）
——『平安時代の仏書に基づく漢文訓読史の研究 後期訓読語体系』（Ⅴ）（汲古書院、二〇一一c）
——『平安時代の仏書に基づく漢文訓読史の研究 訓点の起源』（Ⅱ）（汲古書院、二〇一七a）
——『平安時代の仏書に基づく漢文訓読史の研究 変遷の原理』（Ⅶ）（汲古書院、二〇一七b）
——『平安時代の仏書に基づく漢文訓読史の研究 加點識語集覧』（Ⅷ）（汲古書院、二〇一八）
塚本善隆編『望月仏教大辞典』（世界聖典刊行協会、一九九四）
辻本桜介『助詞イと存在前提：訓点資料の用例を中心に』（『国語国文』九十二―七、二〇二三）
築島裕『喜多院點の展開』（『萬葉集研究』十四、一九八六a、築島（一九九六）に再録）
——『平安時代訓点本論考（ヲコト点図仮名字体表）』（汲古書院、一九八六b）
——『平安時代訓点本論考（研究篇）』（汲古書院、一九九六）
月本雅幸『十二世紀の仏書訓点資料の特質―従来の研究の問題点と今後の課題―』（『国語研究』明治書院、一九九三）
——『因明論疏の古訓点について』（『国語学論集』汲古書院、一九九五）
中田祝夫『古点本の国語学的研究（総論篇）』（大日本雄弁会講談社、一九五四）
中野直樹『真福寺蔵「法華論」は天平勝宝七年の訓点を伝えるか』（『いとくら』十二、二〇二三）
奈良国立文化財研究所編『西大寺叡尊伝記集成』（大谷出版社、一九五六）
西崎亨『正暦寺所蔵『金剛峯楼閣一切瑜伽瑜祇経』について』（『正暦寺一千年の歴史』正暦寺、一九九二）
奈良国立文化財研究所編『西大寺叡尊伝記集成』（大谷出版社、一九五六）
細川涼一訳注『感身学正記』（平凡社、一九九九）
松本光隆『平安鎌倉時代漢文訓読語解析論』（汲古書院、二〇一七）
築瀬一雄『資料紹介 法相宗相承血脉次第』（『南都佛教』二十六、一九七二）
吉田金彦・築島裕・石塚晴通・月本雅幸編『訓点語辞典』（東京堂出版、二〇〇一）
鷲尾順敬『増訂 日本仏家人名辞書』（東京美術、一九八六、増訂新装版）

注

- (1) 漢文を訓読する際に使用された符号の一種。漢字の四隅・周辺・内部などの位置に符号を書き加え、その形と位置によって漢字の読み方を示している。その形式には多くの種類があり、時代により、また宗派・家によってさまざまな種類のヲコト点が使用される。平安初期から存在し、院政期以後は十種ほどに集約された。ヲコト点で示される読みは助詞・助動詞・動詞の活用語尾などが多い。『訓点語辞典』によりまとめた。
- (2) 「訓点」という用語は返点や句切点など記号・符号に限って用いるべきという書誌学の立場もあるが、本稿では国語学での用法に従い仮名も含めて訓点という。
- (3) 落合俊典氏・前島信也氏・浅野学氏・中野（筆者）は二〇二二年四月二十二日に真福寺にて原本調査を行った。
- (4) 訓点資料は言語資料として和文等には無い独特の価値を有するが、常に移点の問題がついてまわる。加点時期や典籍のジャンル（仏書・漢籍）によって差はあるが、ほとんどの資料において前代からの訓点が伝承される面があるので、古語の残存など時代性に注意する必要がある。
- (5) 平安後期になると、訓点が固定化するという見方があり、それに従うのであればⅡの見方も当然想定できる。
- (6) 小林（二〇一八）は(1)と(3)の奥書は少なくとも別筆と見ている。
- (7) 経源は大和興福寺の僧、京都の人で興福寺にて法相を学ぶ。後山城久世の小田原寺に住して密法を修練し、某年寿八十四にて寂す。『日本仏家人名辞典』によりまとめた。経源が興福寺におり、小田原寺へ移ったこと、また迎接房と号したことは中田（一九五四・三三三）が『後拾遺往生伝』から、築島（一九八六a）が『元亨釈書』から指摘している。迎接房については、築島（一九八六a）が『高野山往生伝』にて教懐が「小田原迎接房」と号していたことを指摘している。教懐（一〇〇一―一〇九三）は、経源（一一一三―一一一八）より年長なので、(2)の奥書は教懐の点を経源が移点したと読むことも不可能ではない。なお、

築島（一九九六）は、『血脈類聚記』第四に淳祐―真頼―雅真―暦海―修仁―増蓮―芳源―経源という記述があるとするが、私が見たところ、経源の名は見られない。『法相宗相承血脉次第』（築瀬（一九七二―二二一八））には、その名が見える。

- (8) 『感身学正記』に慶玄の名が見え、「父興福寺学侶慶玄〔従源氏出〕母藤原氏也。」（建仁元年（一二〇一）五月の条）とあり、本書の奥書に見える慶玄は叡尊の父であつた可能性が考えられる。細川（一九九三・三三―三十四）は、追塩（一九九五・一四九）が慶玄について彼が妻帯し学問にも励まず貧しかったことから、学侶というより寺院内の雑務に携わる半俗・妻帯の行人あるいは堂衆ではないかとすることを批判している。また、細川氏は『西大寺有恩過去帳』に慶玄の名とともに論眼房という房号が付されていることを指摘している。高山寺聖教第四部第七函四十五号『大方広仏華嚴経』巻第十の奥書に慶玄の名が見えるが、同一人かどうか未詳。（高山寺典籍文書総合調査団編『高山寺経藏典籍文書目録第二』による）

- (9) 『正暦寺原記』には菩提山正暦寺の院号として、龍華樹院とある由。（大原・大原（一九九二・十五）。また、西崎（一九九二）によって、正暦寺には慶玄の子の叡尊加点による『金剛峯楼閣一切瑜伽瑜祇経』が存することが報告されている。

- (10) 小林（二〇一八）には採録されている。

- (11) 浅野（二〇二三）では、明治四十二年に天平勝宝七年の『法華論』が対校作業に用いられたということを報告する『日本大蔵経編纂学会報』（二十三号）の記事が紹介されている。浅野氏が指摘するように、この本が本書の奥書（1）の『法華論』であつた可能性は考えられる。

- (12) 返点・句切点・語順符・真仮名点・省画仮名点は九世紀以前から加点がある。九世紀以前のそれら訓点については、小林（二〇一七a）等を参照。

- (13) 現存する古い第二群点資料としては、聖語藏『阿毘達磨雜集論』平安初期点や西大寺藏『金光明最勝王経』平安初期点などが挙げられる。加点年次の分かる

最古の第二群点資料は、知恩院蔵『成唯識論述記』（延長六年（九二八）点）である。

(14) 平安初期以前の仮名点は万葉仮名本位であるが、移点の際に片仮名に書き換えられることはありうる。それにしても、本書に見られるような字体の仮名点が平安初期以降にしか確認できていない現状を踏まえると、本書の仮名点がさらに古く天平勝宝七年の訓点である可能性は低いのではないかと考えられる。

(15) 治暦四年の点本にすでに左右の訓が存在しており、元久二年の移点者がそれを移点した可能性もある。

(16) 見かけ上再読字であっても、助動詞・副詞的用法でないものは計上していない。

(17) 不明欄は行全体に加点がない、あるいは虫損や汚損で読解できない用例数を示す。

(18) 不再読と取った例には、単に加点をしなかったが実際には再読していた例がふくまれている可能性がある。仮にそうであったとしても、それは表記上からは分からないので、表面に現れた訓点を素直に取るか、同時期の訓点資料から類推するしかない。

(19) 「於」字より下の字に返点が付いており、「於」字を読んだと判断されるものは下の字の方に付訓があっても「於」字を読んだと認定した。

(20) ニと読ませる訓はニ（シテ）のつもりである可能性もある。

(21) 「テ」とのみラコト点が加点される場合（図12）、ニシテと読んだのかオイテと読んだのか判断ができないので、同じ欄に計上した。

(22) 不明欄には、返読点があるため「於」字を読んだはずだが、付近に付訓がないので読みが不明のものを計上した。

(23) 「イ」の用法はいくつかあり未だ明確になっていない点も多い。それらの議論は小林（二〇一七b）・辻本（二〇二三）を参照。

(24) 当該期の訓点の移点に際しての問題については月本（一九九三）を参照。

(25) 一資料内における、訓法の新古の指摘および固定化の問題点については、月

本（一九九三・一九九五）・松本（二〇一七）・小林（二〇一七b）等を参照されたい。

(26) 移点や校合があればその際の改編や遺漏を考える必要性が生じ、奥書が無ければいかなる集団に属する人物の手によるものか、加点時期はいつかなどの問題が生じる。

(27) 当然、他本の訓は加点時期だけでなく読み（訓法の新古含む）も異なる。

(28) ここでは仁和寺蔵『医心方』を指している。

(29) この考えは、中野（二〇二三）でも同じように述べた。

(30) 本書は移点資料であるので、ただちにこれを鎌倉時代語の資料として無批判に活用できるものではない。どの程度訓法に新古がみられるのか、また、加点者が移点に用いた資料の訓点をどう引き継いでいるのかを、他の訓点資料ともできれば比較して考慮に入れる必要がある。繰り返しになるが、そういった前代までの訓点を一部（時としてほとんど）引き継ぎ、また、改変しながら訓読するのが鎌倉時代の訓読の一つのあり方なのであり、本書から言語情報を引き出す際にはそれらを踏まえておくべきである。

【付記】

本資料の閲覧・利用に際して真福寺当局より御厚誼を賜りました。本文調査に際しては、国際仏教学大学院大学日本古写経研究所より御支援を賜りました。また、日本古写経研究所令和五年度第一回公開研究会での発表の席上にて先生方より御意見を頂戴しました。記して感謝申し上げます。